

リトル・チルドレン

2007(平成19)年8月19日鑑賞<OS名画座>

★★★★



監督・脚本＝トッド・フィールド／出演＝ケイト・ウィンスレット／パトリック・ウィルソン／ジェニファー・コネリー／ジャッキー・アール・ヘイリー／ノア・エメリッヒ／グレッグ・エデルマン／フィリス・サマーヴィル／ジェーン・アダムズ／タイ・シンプキンス／サディ・ゴールドスタイン（ムービーアイ配給／2006年アメリカ映画／137分）

……ボストン郊外の住宅地で過ごす、恵まれたはずの家族たち。しかし、3歳の娘をもつ主婦サラや、司法試験の勉強を続ける主夫ブラッドをはじめ、そこには大人になりきれない大人たちがいっぱい……？ かつての『金妻』を彷彿させる(?)不倫騒動と、元警官による元性犯罪者の排斥騒動の中、四者四様のクライマックスに向け、実に興味深い人間模様が……。 「別の人生への渴望」とは日本流に言えば「自分探しの旅」だが、それって「甘え」では……？ そして、ホントにそんなことが可能な……？



5度目の正直は……？

私が映画検定の受験勉強の中で学んだ知識では、全世界で最高の興行収入をあげた映画は『タイタニック』(97年)。すなわち、「全世界での興収が10億ドルを超えた最初の映画で、総興収は18億4500万ドル」だ(『映画検定 公式テキストブック』306頁参照)。もちろん、その主役はレオナルド・ディカプリオとケイト・ウィンスレットの2人。

『タイタニック』でローズ役を演じたケイト・ウィンスレットは、当然のようにアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたが、レオナルド・ディカプリオと共に惜しくも受賞はならなかった。その後、ケイト・ウィンスレットは『エターナル・サンシャイン』(04年)で2度目の主演女優賞にノミネート、そしてこの『リトル・チルドレン』で3度目の主演女優賞にノミネート。ちなみに、彼女は『いつか晴れた日に』(95年)でアカデミー賞助演女優賞にノミネート、また『アイリス』(01年)で2度目

の助演女優賞にノミネートされているから、アカデミー賞へのノミネートは、この『リトル・チルドレン』で何と5度目ということになる。さあ、5度目の正直はなるのだろうか……？

豊かな時代の主婦は、どんな不満を……？

貧しい時代は「おいしいものを腹いっぱい食べたい」「狭いながらも、楽しいわが家に住みたい」という単純な欲求だったが、衣・食・住すべてが満たされてくると、人間の欲望はとめどもなくあちこちに膨れ上がっていくらしい……？ もっとも、昨今の日本の多くの若者のように、今現在十分満たされているうえ、自分が何をしたら何ができるのか、何をしたら何がかわるのかがサッパリ見えないため、逆に何の夢も希望ももてないし、何の欲もないというヘンな現象も……？

しかし、会社員リチャード（グレッグ・エデルマン）の妻として、ボストン郊外のウッドワード・コートにある立派な一戸建ての家に住み、かわいい3歳の娘ルーシー（サディ・ゴールドスタイン）を連れて公園デビューを果たしたケイト・ウィンズレット扮する専業主婦のサラは、外から見れば何の不満もない生活のはず。しかしサラには、①対話のない夫との生活に対する不満、②自分の娘ルーシーと心の底からわかり合えないことへの不満、③近所の主婦たちとの公園での育児やセックスについての開けっぴろげながら知性のかけらもない会話への嫌悪感などでいっぱい……。

これらの不満の根っこは、大学で文学を学び修士号まで持っている自分に、なぜこんな立場でこんな役割しか与えられないのかという気持の中にあるわけだが、そうかといって、ホントに自分に何ができるのかと考えると、実は何もナシ……？ 「ボヴァリー夫人」の読書会における分析の結果、その不満をひと言で言えば「別の人生への渴望」ということになるらしいが、その分析の当否はともかく、サラがホントに別の人生を歩んでいけばその先は一体どうなるの……？ ひょっとして、リトル・チルドレン、すなわち、大人になれない大人の一人（代表？）であるサラなら、ホントにそんな行動を……？

これからは、日本でもこういう男性が……？

子供を遊ばせるため公園に集まる主婦たちの噂的のが、秘かに「プロム・キング」と呼ばれている主夫ブラッド（パトリック・ウィルソン）。ドキュメンタリー映像作

家をしている、何ゴトにも完璧な妻キャシー（ジェニファー・コネリー）の応援を受けて（に養われて……？）、長男アーロン（タイ・シンプキンス）の世話をしながら、司法試験にチャレンジしている専業主夫という設定だ。

彼はアメリカの法科大学院を卒業した後、2度司法試験を受けたが失敗し、今度の3度目が事実上ラストチャンス……？ そんな背水の陣のはずだが、夕食の後は毎日図書館へ行って勉強するのが日課となっているにもかかわらず、勉強する気になれず、スケートボードに興じている若者たちをボーと眺めているのが実態。これではとても、とても……？

ここで詳しくは述べないが、日本でも2004年4月に法科大学院が発足し、2006年5月には法科大学院卒業生を対象とした1回目の新司法試験が実施されたが、その合格率は48.3%で、平均年齢は28.9歳。2年目、3年目とその不合格者が「滞留」していくことを考えると、日本でもブラッドのような男性がこれから次々と生まれてくることは必至。

もっとも、日本ではこの映画におけるキャシーのように、自分の収入がタツプリとあり、夫が収入のないまま勉強することへの理解を示す女性は少ないだろうし、男性側も食事をつくり、子育てをしながら勉強することに抵抗感をもつ人が多いかも……？ そういう視点からも、法科大学院卒の司法試験浪人という境遇の主人公の登場は、まさに今風……？

司法試験はダメでも、歌の実力なら……？

そんなブラッドを演ずるパトリック・ウィルソンは、司法試験の勉強はイマイチだし、出来の良すぎる女房からのプレッシャーに押され気味。その結果、「リトル・チルドレン」すなわち、大人になりきれない大人の一人（代表？）として、同じ子育てをしている主婦サラととんでもない不倫をしでかすことになるのだが、実は彼の歌の実力は折り紙付き……？

すなわち、このパトリック・ウィルソンは私が大感激した『オペラ座の怪人』（04年）で、オペラ座の支配人、すなわち「白馬に乗った王子様」のラウル役で、オペラ座の怪人ファントムとクリスティーヌの奪い合いを演じた俳優。したがって、そんな彼なら、あまり向いていそうにない司法試験の勉強をするよりも、歌の道に進んだ方がよかったのでは……？

おっと、こりゃとんでもない混線をしてしまったかも……？

リチャードはレスターとよく似たキャラ……？

1999年のアカデミー賞作品賞を受賞した『アメリカン・ビューティー』の主人公は、新興住宅地に住む中年男レスター。見栄っ張りな妻と反抗期の娘と共に死んだような毎日を送るレスターに異変が起きたのは、娘の友人の美少女アンジェラとの出会いによって彼女に対する恋心が生まれたため。そんなバカなと思うような男と女たちの物語が次々と展開していく中、いかにも皮肉な「アメリカン・ビューティー」の姿が見えてくるというのが、この映画のポイントだった。

『リトル・チルドレン』におけるサラの夫リチャードは、まさにこの『アメリカン・ビューティー』の主人公レスターとよく似たキャラ……？ その共通点は、何よりもはや妻の身体には何の魅力も感じる事ができず、ある日インターネットの映像でめぐり会った美しい女性の悩ましい肢体にハマってしまったというヘンな中年男だということ。妻に内緒で申し込んだ待望の彼女のパンティが送られてきた日、それを顔につけた彼がとった行動は……？ それこそ、まさに『アメリカン・ビューティー』のレスターがみせた行動と共通する、何とも悲しい中年男の姿……？

『リトル・チルドレン』はそんなリチャードに見切りをつけたサラと、魅力的な主夫ブラッドとの不倫がメインの映画だから、リチャードのエピソードは少ないが、ひょっとしてアメリカの中流（上流の下？）家庭には、こんなキャラの夫がウヨウヨいるのかも……？

助演男優賞にノミネートされたのは……？

『リトル・チルドレン』は、ケイト・ウィンスレットのアカデミー賞主演女優賞へのノミネートと脚色賞へのノミネートの他、ジャッキー・アール・ヘイリーが助演男優賞にノミネートされた。彼が演じるのは、未成年への性犯罪で服役し、釈放後今は母親メイ（フィリス・サマーヴィル）の家に住んでいる中年男ロニー。

彼が近所の人たちから危険人物視され、疎んじられているのは当然だが、子供の多い新興住宅地ならそれはさらに強いはず。ある日、子供たちでいっぱいプールにロニーが入ってきただけで、プールは大騒動となり、警官がやってくる始末……？

ただ1人彼を愛し、守ろうとしている母親のメイは、恋人ができれば倒錯した未成

年者への性的欲望など吹っ飛んでしまうはずだと考え、デートのお膳立てに懸命。そしてある日、こちらも心因性の障害をもつ女性シーラ（ジェーン・アダムズ）とデートしたロニーは、結構いい印象を与えるのに成功したが……？

パンフレットによると、ロニー役を演じたジャッキー・アール・ヘイリーは、12年ぶりに出演した『オール・ザ・キングスメン』（06年）によって再び俳優生活続ける決心をし、トッド・フィールド監督にオーディション用のビデオテープを送ったことによって、ロニー役が実現したとのこと。名俳優ばかりが登場しているこの映画にあって、ロニーを演ずるジャッキー・アール・ヘイリーの演技はまさに絶品！ そんなベテラン脇役の、まさに助演男優賞ノミネートにふさわしい名演技もじっくりと……。

ラリーもレスター風のヘンな奴……

他方、こんなロニーを目の敵とし、「子供を守る親の会」の活動を懸命に続けているのが元警官のラリー（ノア・エメリッヒ）。彼はしばらく会っていなかったブラッドの友人。ラリーがブラッドを「子供を守る親の会」に勧誘し、さらに学生時代にアメリカン・フットボールの選手だったブラッドを地元のナイターチームに誘ったことによって、2人の接触が深まっていくのだが、ラリーがロニーに対して示す敵意は明らかに常軌を逸したもの。

彼がなぜそんなにロニーに対して憎悪感をむき出しにしているのかは、ロニーの家前でハンドマイクを持ってかなりたてている彼に対して、母親のメイが「あんただって、昔何をしたのよ！」と抗議する姿を見ていると、なるほどとよくわかる。つまり、彼のロニーに対する憎悪は、自分が警察官としてやってしまった過去の過ちに対する嫌悪感の裏返し……？

そんな欲求不満のはけ口にさせられたのでは、ロニーやメイがかなわないのは当然だが、この3人の気持の行き違いから、クライマックスでは大変な事態を招くことに……。

ブラッドが受験勉強に集中できないのは……？

完璧に仕事と家事をこなしているキャシーは、ブラッドに対しても、頑張れば3度目のチャレンジはきっと成功すると信じていることは明らか。そして、それを当然の

ようにブラッドに対して伝えているが、どうも最近のブラッドの勉強の様子は心配……。しかし、キャシーがそれを直接ブラッドに対して言えないのは、サラが夫のリチャードに対して不安や不満を打ち明けられないのと全く同じ……。したがって、そんなキャシーが少しでも自分の気持ちを打ち明けることができるのは、自分の母親だけ……。

久しぶりに出会った友人ラリーの出現によって、「子供を守る親の会」の活動につき合わされることになったブラッドは少し気の毒だが、ラリーに勧められた結果、週に1度アメリカン・フットボールのチームの練習に加わったのは、あくまでブラッドの意思によるもの。しかし、実はこれは、司法試験の受験勉強の重圧から逃げたいため……？

多分それは、公園やプールでの子育ての延長として親しくなったサラと、なるべくしてなった不倫も同じ……。もっとも、アメリカン・フットボールの試合での劇的な勝利による気持の高揚の中、サラに対して言ってしまった(?)「一緒に逃げよう」とのブラッドの言葉が、どこまで本気の人生の決断だったのかは、私にはよくわからない。それが本気であれば立派なものだが、「リトル・チルドレン」=大人になりきれない大人たちの、ちょっとした思いつきだったとすれば、ナンセンス……？

さらに、そんなクライマックスに向けて行動を起こすべき時に、いつも傍で見ていただけのスケートボードの少年たちから、「やってみろよ」と勧められてそれにチャレンジしたのも、実は何かから逃げるため……？

不倫騒動を『金妻』と対比してみれば……

この映画では、夏の暑い盛りを毎日のようにプールで息子のアーロンと娘のルーシーと一緒に遊ばせながら、親同士がドンドンと親密になっていく姿が描かれる。そんな中、サラに芽生えてきた欲求は、「彼に触れたい、触れてほしい」というハッキリと性的なもの……。しかし、いくら「大人になりきれない大人」であっても、いきなり衝動的に不倫に走るわけではなく、いい関係を続けていくためには、毎日4時に握手をしてバイバイし、「また明日ね」という形で良識を守っていたのは当然。

しかし、そんな日常の連続を突然遮断する非日常的な出来事が起こると、潜在的な欲望が一挙に噴出するのはよくあること。それがこの2人の場合は、突然襲ってきた夕立だ。ずぶ濡れになってサラの家に飛び込んだ2人は、遂にあるシチュエーション

の中で一線を越えることに……。

こんなシーンを見ながら思い出したのが、24年前の1983年に大ヒットしたテレビドラマ『金曜日の妻たちへ』。これは新興住宅地に住む核家族間の交流とそこから起きる不倫をテーマとしたもので、『金妻』が不倫の代名詞になったもの。しかし、『金曜日の妻たちへ』とタイトルされているように、こちらの不倫はせいぜい週末のみ……？ それは小林明子が歌って大ヒットした『恋におちて』でも、「土曜の夜と日曜の貴方がいつも欲しいから」と歌われているとおり……？

しかし、ブラッドとサラの場合はその逆で、家族と共に暮らす週末を除くウィークデーは毎日……？ こんな風に深みに入っていけばヤバイことは明らかだが……。

さて、女のカンは……？

サラの不倫が夫のリチャードにバレることはまずありえないはず。なぜなら、サラがリチャードに無関心なのと同じように、リチャードもサラに対して全く無関心だから。そういえば、パンティを被ってパソコンの前に座っている姿をサラに目撃された「あの一事件」以来、リチャードはスクリーン上に全然姿を見せないが……？

しかし、ブラッドの不倫が妻のキャシーにバレないかどうかは微妙。あの夕立の日以来、互いをむさぼり合うような激しいセックスが毎日のように続いていたが、もちろんそれを目撃した人間は誰もいない。しかし、アロンから最近よくルーシーと一緒に遊んでいると聞かされたキャシーが、「一度その両親を食事に招待しなければ……」と言い始めたからちょっと微妙なことに……。

もちろん、ブラッドにはそれを断る理由はなく即座にオーケーし、サラとリチャード夫妻が食卓を囲んで、ブラッドとキャシー夫妻と楽しい会話を交わすことになった。さあ、そこで女のカン、すなわちキャシーのカンは、微妙な会話の中からブラッドとサラが不倫関係にあることを感じとることができるのだろうか……？

「自分探しの旅」が大はやりだが……？

「大人になりきれない大人たち」をテーマとしたこの映画のエッセンスは、「ボヴァリー夫人」の読書会でサラが、ブラッドのことを頭の中に思い浮かべながら言う「別の人生への渴望」という言葉に集約されている。そう、サラの不満の原因はその一点にあるわけだ。

そう思いながらよく考えてみると、日本ではここ数年、「自分探しの旅」という言葉が大はやり。主に若者を中心に生まれてきたこのフレーズが、最近は何世代の大人たちも……？ 私は別にこの「自分探しの旅」を否定するつもりはないが、気に入らないのは、これが現在の自分の状態に対する不平不満の裏返しとして言われていること。つまり、今の自分が置かれている状態の中で、どこまでベストを尽くしているのか多少あいまいにしたまま、「自分が実力を発揮できないのは、あのヘンな上司がいるからだ」などと安易な言い訳をし、だからこの会社を辞めて新たな「自分探しの旅へ」などとカッコいいことを言うわけだが、そんなあなたにホントの自分が見つかるの……？

サラもそれと同じような意味で「別の人生への渴望」を唱えたわけだが、さてそのチャレンジは……？ そして、その結末は……？

四者四様のクライマックスは……？

この映画においては、ブラッドとサラの2人が主人公で、キャシーとリチャードの2人は主人公たちの行動をより鮮明に浮かびあがらせるための陰の役割……？

不倫にのめり込んでいく2人と、2人のそんな不倫関係を直覚するキャシー。そんな中、ブラッドの3度目の司法試験の日が訪れ、ブラッドはそれにチャレンジしていくが、さてその実態は……？ そして、いよいよアメリカン・フットボールの試合で劇的な勝利を収めた日、ブラッドは「一緒に逃げよう」というかなりバカげた行動を計画し、それに同意したサラと共に2人はいよいよクライマックスに至る行動へ……。

他方、ブラッドとサラの不倫騒動とは別に、郊外の住宅地に潜在する問題点を象徴する人物が、ロニーとラリーの2人。静かな住宅地に次々と問題を引き起こすこの2人の男にも大きな事件が発生し、思いもかけないクライマックスへ至っていく……。

このように、この映画の見どころは、最後に訪れてくる四者四様のクライマックスの姿。それを見てやりきれない思いが胸いっぱい広がるはずだが、それと同時にあなたが思うことは一体ナニ……？

ナレーションの多さは、ちょっと……？

一般に、作家性の強い映画監督はナレーションを嫌うはず。なぜなら、ナレーションを多用すればするほど、各シーンごとの登場人物の心理を表情やしぐさで巧みに表

現する俳優の名演技を必要としなくなり、その分映画の深みが失われてしまうから……？

2001年の長編デビュー作『イン・ザ・ベッドルーム』でアカデミー賞作品賞・脚色賞を含む5部門にノミネートされて、一躍世界的に有名になったトッド・フィールド監督が、5年ぶりに満を持して放った長編映画第2作がこの『リトル・チルドレン』だが、意外にもこの映画はナレーションが多い。とりわけ、映画がスタートした直後のサラの人物像とブラッドの人物像の紹介、そして公園でサラとブラッドがみせた周りの主婦たちをアッと驚かせる抱擁とキスに至るまでの流れについて、やたらナレーションが多い。もちろん、それによって観客がそれぞれの人物像や状況を理解するのに役立つのは当然だが、これはちょっと……？

ひょっとして、『リトル・チルドレン』がアカデミー賞作品賞・監督賞そして脚色賞にノミネートされなかったのは、これが原因……？

2007(平成19)年8月21日記

ミニコラム

18歳はムリ、22歳が妥当？

07年5月に成立した、憲法改正の手續を定める国民投票法で投票年齢が18歳以上とされたことを契機として、鳩山法相が08年2月法制審議会に成人年齢の引き下げを諮問した。そこで今、現行民法の成人20歳を18歳とする議論が起きている。織田信長時代の「元服」すなわち大人になる儀式は14、5歳だったが、その時代の平均寿命は、^{うたない}話の『敦盛』にあるとおり、「人間五十年」？ しかし今や平均寿命は約80歳。また全員が大学に入学できる時代だが、今の20歳は大人？

式典でバカ騒ぎする新成人をみれば、

それはとてもムリ。しかも若者たちの国政、地方選挙における投票率は？

ヒラリー vs. オバマの民主党大統領予備選挙に見る若者たちの熱気に比べれば、米日の差は歴然だ。そんなに劣化した今の日本で、ホントに18歳を成人として大丈夫？ 大人になりきれない成人が増えれば、ますますこの国はヤバイのでは？ 親離れもできない、幼稚でガキのような20歳が蔓延している日本では、せいぜい22歳成人が妥当かも……？

2008(平成20)年3月5日